所属：呉工業高等専門学校　人文社会系分野

研究タイトル：

日本人英語学習者の相互行為能力の発達・指導



氏名：	鈴木　浩輔　／SUZUKI Kousuke	E-mail：	k-suzuki@kure-nct.ac.jp
職名：	助教	学位：	修士（教育学）
所属学会・協会：	全国英語教育学会、中国地区英語教育学会、外国語教育メディア学会、日本国際教養学会、日本教科教育学会		
キーワード：	相互行為能力、会話分析、語用論、第二言語習得、英語教育		
技術相談 提供可能技術：	・外国語における相互行為（能力）、語用論に関する研究 ・会話分析の手法を用いた相互行為（録音・録画）の分析 ・英語学習指導（資格試験含む）		

研究内容：日本人英語学習者の相互行為能力に関する実態把握

私は、第二言語（L2）教育を専門としながら、コミュニケーションに関する研究を行っています。その中でも特に口頭言語能力モデルの一つである相互行為能力（interactional competence、 IC）に着目し、現状としては日本人英語学習者の IC の実態把握を目指して調査を行っています。具体的には、学習者が抱える IC に関するニーズの分析（さまざまなインフォーマントを情報源とした半構造化面接、質問紙調査など）や、相互行為の実践を会話分析し学習者の IC を記録する調査などを行っています。

IC は L2 教育研究において近年着目されている能力であり、その発達、指導、評価など多くの研究が行われています。IC は、日常生活における目的を達成するための会話の方法（e.g., 順番交替、修復、行為のデザイン）を、相手に合わせながら円滑に用いる話者の能力です。ここでの会話の方法は、主に社会学における会話分析研究で明らかにされてきたものを指しています。例えば、依頼を断る場面を例にとれば、IC が高い話者は断るためにメッセージをただ伝達するのではなく、社会的調和の維持に有効な会話の方法（e.g., 前置き、緩和）を用いて、相手の発話に理解を示したり共感や配慮を示したりしながら断りを行うことができます。端的に言うと、IC は対話者の存在を重視した会話（talking）の能力であり、社会で一般的に期待されているいわゆる「コミュニケーション能力」と非常に類似しています。

IC はここ 20 年ほどで発展・具体化されてきた新しいモデルです。従来の L2 教育研究では、学習者の口頭言語能力を指導・評価する際は、心理言語学に基盤を置くモデルが用いられてきました。この心理言語学的なモデルでは学習者が発話する文脈や対話者は考慮せず、会話というよりモノローグなスピーキング（speaking）を誘出し、その発話の正確さ（発音・語彙・文法）と内容伝達の速度を重視します。実際に指導や教材、多くのテスト（英検、TOEFL 等）がこのモデルを基に作られています。しかし、実生活で必ず存在する対話者や文脈を軽視したこのモデルの妥当性に近年疑念が高まり、代替として IC モデルが発展し関心が高まるようになりました。また、近年実際にこれまでの心理言語学的なスピーキングのモデルでは、社会生活で期待される会話の能力（IC）は十分に説明できないことも先行研究で明らかになってきました。例えば、TOEFL のスピーキングテストの得点が高い学習者と比較して、得点が低い学習者の方が IC が高いと評価されたり、母語話者と比較して学習者の方が IC が高いと評価されたりする結果が示されました。想像に難くないように、スピーキングが得意な人が必ずしも会話（IC）も得意ではないことがわかります。

これを受け、L2 教育研究では、社会生活における需要やテスト使用者が期待を寄せるものは、スピーキングではなく会話(IC)であるとして、IC の発達・指導研究や IC テストの開発研究などが進展してきています。しかし、前述したように IC は比較的新しいモデルであり、明らかになっていないことが多く存在します。特に、IC は学習者の母語や社会文化的要因とも関連があることが想定できますが、それらの要因の統制を行なった研究は依然として希少です。また、日本人英語学習者を対象とした IC 研究の蓄積はほとんどなされていません。

以上のような背景を踏まえ、私は特に日本語を母語とする日本人英語学習者に対象を絞り込み、彼らの IC の実態を把握し、今後の IC 指導や教材及び評価の開発に示唆を与えるべく調査を進めています。

提供可能な設備・機器：

名称・型番（メーカー）	